

【伊藤総領事メッセージ 2018年9月】

日本の8月には各地で様々な祭りが開催されますが、当地でもジャパン・フェスティバル・カナダが盛大に行われました。日系企業が100社近く進出しているトロント隣接のミシサガ市において、8月25-26日に開催されたこの祭りは、今年で3年目を迎えました。ミシサガ市役所前のセレブレーション・スクエアには、特設舞台に加え、日系の様々な企業や団体の展示・イベントのブース、焼きそばや焼き鳥などの日本の食べ物を売る屋台や日本酒コーナーも設けられ、2日間にわたり合計で約8万人の来客があったようです。これだけの規模の祭りを入場料も取らずに成功させてきているのは、主催団体やミシサガ市をはじめとする関係者の皆様方、またスポンサーやテナントとなってくださっている方々のおかげであると、改めて感謝を申し上げる次第です。



開会式には、トルドー・カナダ首相からのメッセージを携えた地元ミシサガ市選出の国会議員、石兼駐カナダ大使、クロンビー・ミシサガ市長と市議会議員、マカリオン前市長及び私が来賓として挨拶を述べました。特に印象深かったのは、36年間も市長を務め現在97歳になられたヘイゼル・マカリオン前市長が、ミシサガ市の姉妹都市である愛知県



刈谷市の名前が入った法被を着て、日本との関係につき熱弁を振るわれたことです。「ハリケーン・ヘイゼル」とも呼ばれるマカリオン前市長は、ミシサガ市と刈谷市の姉妹都市関係設立にも尽力され、ミシサガ市を「カナダにおける日本の首都」と呼んでくださいます。元気なお声と魅力的な笑顔に、来場者も

心を奪われたようでした。

実は、私は密かに自分は「晴れ女」であると思っており、今回の開会式も何とか天気は持つであろうと期待していました。しかし、結果としては開会式の途中から風雨が始まり、その後に行われた和太鼓の演奏では大雨になってしまいましたが、どうやら非常に強力な「雨男」がいたのです。それは、日本からカナダへ和太鼓ツアーを行っていた林英哲さんです。元々、和太鼓は雨乞いの時にも使われ、英哲さんと一緒に演奏を行う弟子たちのグループの名称も「英哲風雲の会」であり、英哲さんご自身が、「自分は雨男である」とおっしゃっていました。天界の風雲を呼び寄せるほどに素晴らしい演奏であったことは言



うまでもありません。太鼓を叩くと表面から水しぶきが飛ぶような雨にもかかわらず、屋外の広場を埋め尽くした観客は、林英哲さんと英哲風雲の会、そして地元トロントの和太鼓グループである永田社中の演奏を最後まで聞き、大きな拍手を送ってくれました。カルガリー、バンクーバー、オタワを巡回し、カナダ・ツアーの最後の演奏がミシサガでの



ジャパン・フェスティバルとなりましたが、観客の皆様には雨に打たれながらも大満足していただけたと思います。

この3日前には、日系文化会館(JCCC)で林英哲さんと風雲の会の演奏会が行われました。こちらは室内演奏で、チケットは発売早々に完売し500名以上のお客様が来場しました。初めて英哲さんの演奏を聞き「これほど素晴らしいものは見たことがない」と大絶賛をされる多くのカナダ人の方々の声を聞き、我々も非常にうれしく、また誇らしく思った次第です。全身を使い、時には30分以上も集中して演奏を続ける英哲さんも既に66歳のことですが、一日4キロのジョギングは欠かさず、食事にも気を配り、日々訓練を重ねていらっしゃるそうです。今や和太鼓の世界ではレジェンドとして知られる林英哲さんが、42年前にトロントに初めて来てJCCCで演奏した際には、JCCCの床に寝袋で泊まった、との話も披露してくださいました。

英哲さんからはいろいろなお話を伺いましたが、一番心に残っているのは、今回のツアーでカルガリーを訪問した際に受けとった「桜のバチ」の話です。ブリティッシュ・コロンビア州のプリンス・ルパートに住んでいた日系人のシミズ・ショウタロウさんは、戦時中の日系人

の強制収容を体験したものの再びプリンス・ルパートに戻り、1959年及び1960年に合計1500本

の桜の木を市に寄贈したそうです。それはシミズさんにとって、自分たちを再び受け入れてくれたことへの感謝と和解の気持ちであったと思われます。この桜の木は街の人々にも愛され、憩いの場を提供していたのですが、今年初め、何の間違いか、何本かが伐採されてしまいました。プリンス・ルパートの市民たちも驚き、どうしてこうなったのかと怒る声もあがったようです。心ある市民は、この切り倒された桜の木を、ショウタロウさんの



孫にあたりエドモントンに在住しているグレッグ・シミズさんに送りました。和太鼓の指導をしているグレッグさんは、英哲さんが今年カナダを訪問することを知り、切り倒された桜の木を使って自ら太鼓のバチを作り、その最初の完成品をカルガリーに来た英哲さんに贈ったそうです。英哲さんは、ステージでその話をされた後、桜の木から作られたバチで演奏をされました。たとえ間



Photos by Dave Ohashi, © 2018 The Japan Foundation and Consulate-General of Japan in Toronto

違いがあっても傷つけられても、善意で乗り越えて友情を深める— 世代を越えて、ショウタロウさんとグレッグさんがカナダの人々に持つ感謝と友情の気持ちは、英哲さんに渡したバチによって世界中に伝わっていくことになるでしょう。

英哲さん達が日本に戻られた2日後、私はトロントの FAN Expo なる祭りに招待されてトロントにやってきた、「めいどりーみん」というメイドカフェの代表者3名の表敬を受けました。今やメイドカフェは、オタク文化と共に世界中に知られる存在となっており、今年8月上旬にモントリオールで開催されたオタクソンでも彼女たちは大人気だったそうです。一見すると「かわいい」彼女達ですが、話を聞いてみると、既に店長として年間売上が10億円を超える支店で人事管理や業務管理を行っていたり、全国で470名になるメイドの採用や訓練の責任者であったり、海外公演のために外国語でのシナリオ1時間分を暗記して舞台でのパフォーマンスを成功させるなど、プロ意識を持って仕事に取り組んでいるしっかり者であることがわかりました。結婚・出産のあとに再び職場に復帰したメイドさんもあり、また「もうメイドとして働くにはちょっと…」という女性にはフロアーではなく事務系の仕事なども提供しているとのこと。将来はビジネスをもっと拡張したい、とキャリアウーマンとしての抱負も語ってくれました。まさにこれは、女性による、女性が輝ける職場の例であり、「女性が輝く社会」に貢献しているのではないかと思います。メイドカフェの客層の30～40%は女性や小さい子供を連れた家族とのことですので、日本に帰ったら立ち寄ってみようかな、と思えてきました。

